

四人の宗教改革者

—— ルター、ミュンツァー、ツヴィングリ、カルヴァン —— (上)

しま だ いさむ
島 田 勇

序論

ルター（ドイツ人）、ミュンツァー（ドイツ人）、ツヴィングリ（スイス人）、カルヴァン（フランス人）は、15世紀末から16世紀初めに生まれた。みな中産階級出身で、それぞれ大学で学んでいる。大学卒の聖職者は、全聖職者の1%にも満たなかった時期である。みな結婚して子供を持った。ミュンツァーを除いて、高い収入をえていた（ルターが200グルデン、ツヴィングリが70グルデン、カルヴァンが500フローリン。金貨一枚10万円で換算）。彼らはカトリックから離れてプロテスタント教会をつくり、キリスト教世界を分断した。

16世紀はまだ中世と連続するあらあらしい社会だった。ルネサンスとユマニズムを経験したが、その社会の基層は中世のままだった。宗教改革の時代である1517年から64年は、ルネサンスの終わりの時期に相当し、大航海時代ともかさなっていた。ルネサンス、大航海時代、宗教改革は、近代を開いた3つの要因であるが、その関係は十分に解明されてはいない。

宗教改革は、ザクセン地方またスイスという辺境で始まった運動であったが、ヨーロッパの中心を巻きこみ、ヨーロッパ全体に影響を与えた。宗教改革が社会の動乱を引き起こしたが、ドイツ農民戦争はのちのドイツ社会の構造を決定し、ユグノー戦争はフランス社会の根本を規定した。カルヴァン主義は、のちの西ヨーロッパ、北アメリカの社会を先導した。

ここでは、四人の宗教改革者に焦点をあて、彼らの生い立ちから、彼らの思想、行動をあつかい、比較の糧としたい。

四人の宗教改革者はみな、司祭身分であり、説教がうまかった。

特徴的なのは四人の死に方であろう。ミュンツァー（35歳）は刑死、ツヴィングリ（48歳）は戦死、ルター（63歳）とカルヴァン（55歳）はベッドで死んだ。生き方の壮絶な

者は激しく死んでいる。

四人の性生活についても、わかる範囲で書いた。

もし、四人の宗教改革者が存在しなかったなら、歴史はどう動いていったか。ヤーコプ・ブルクハルトがいうように、宗教改革が起こらなければ、カトリック教会は消滅していただろうか。あるいは中世がなし崩しに続いていただろうか。

第一章 ルターの帰還

① ルターの回心

マルティン・ルターは、1483年、中部ドイツのザクセン地方の鉱夫の親方の長男に生まれた。エルフルト大学で、哲学、法学を学んだ。アウグスティヌス会修道士にして、ヴィッテンベルク大学教授。ヘブライ語、ギリシャ語、ラテン語に堪能であった。

厳格な家庭に育ったルターは、父親ハンスへのエディプス・コンプレックスをいだし、いくら告解しても癒されないルターは、さまざまな危難のはてに回心し、父親への反抗心を神への反逆におきかえ、ついにはローマ教皇（パパ）への反逆にいたる。その言動は過激であり、中世カトリック世界を崩壊させる一因となった。

ルターの回心は、落雷に遭い、「聖アンナよ、救いたまえ、私は修道士になります」と誓う場面から始まる。エルフルト修道院の聖歌隊の一員だったルターが、「啞者の霊をキリストが癒す」という歌の場面で倒れ、「私は違う！」とうなったことにみられる。ルターが否定したかったのは、自身の沈黙の状態だった、と精神分析学者のE・H・エリクソンは推論する。そして、1513年か14年ころ、ルターはトイレの上で回心した。精神的にも身体的にも便秘しがちであったルターが、自己を解放したときだった。いわゆる「塔の体験」である。無口だったルターが爆発的におしゃべりになり、シェイクスピアに匹敵するほど雄弁になった。この間に、アウグスティヌス会修道士ルターは、ヴィッテンベルク大学神学教授になり、1517年、「95か条の提題」を発表して、宗教改革をはじめた。

回心とは、心理学者ウィリアム・ジェームズによれば、「それまで分裂していて、自分は間違っていて下等であると意識していた自己が、宗教的な実在者をしっかりとつかまえた結果、統一されて、自分は正しくて優れており幸福であると意識するようになる、緩急さまざまな過程」である。神学的に言えば、「神から離れて生きている人間が全人格をもって方向転換し、神にたちかえる信仰の行為」である。ジェームズは、回心した人間を二度生まれ（twice-born）、しない人間を一度生まれ（once-born）と分けた。ルターが二度生まれならば、デジデリウス・エラスムスは一度生まれということになる。ジェームズは、一度生まれを健全な魂、二度生まれを病める魂と呼ぶ。「病める魂」である二度生

まれの人、パウロ、アウグスティヌス、ルターのように回心して、「女嫌い」であると、フェミニストのカレン・アームストロングは言っている。エリクソンによれば、一度生まれの人にとって、「青年という時期は……人生の中で最も自己意識的でなく生産的な時期である」という。

ルターの研究は、青年期、農民戦争期までに関する研究が多く、晩年のルターは役立たずとしてあつかわれる。ローラント・ベイントンは、晩年のルターを「怒りっぽく、横柄で、毒舌で、下卑たところさえある老人」と呼んだ。しかし、晩年のルターも等しくあつかわれる必要がある。

② ルターのヴィッテンベルク帰還

「男は夜陰にまぎれて、ヴァルトブルク城を脱出した。小脇に『新約聖書』のドイツ語訳をかかえて……」と書けば嘘になろう。あの慎重の上にも慎重なルターがこんな危険なまねをするだろうか。事実はどうか。

1521年4月、ヴォルムス帝国議会において、神聖ローマ（ドイツ）皇帝カール5世の前で福音主義を主張したルターは、公衆の大騒動を引き起こした。ヴォルムスからヴィッテンベルクへの帰り道、ザクセン選帝侯フリードリヒの手の者によって拉致され、ヴァルトブルク城にかくまわれた。そこでカトリック勢力からの迫害を受けずに、ひげを生やした「騎士イエルク」として、『新約聖書』のドイツ語訳をしていた。ルターの手元には、エラスムス校註によるギリシャ語『新約聖書』とヴルガータ聖書があった。詩人のハインリッヒ・ハイネによれば、ときどき邪魔をしにくる悪魔に、ルターは怒ってインク壺を投げつけ、それ以来、悪魔はインク壺を恐れているという。

人々はルターの殉教を嘆き悲しんだが、ルターが無事であることはやがて知れた。ヴィッテンベルクに帰るルターが目撃されている。ある商人たちが騎士姿のルターに会ったのだ。宿屋であろう。ルターが白昼堂々と帰ったことがわかる。ヴァルトブルク城からヴィッテンベルクまで、ザクセン選帝侯領内でのルターの通行は安全だったのだろう。選帝侯はルターの帰還にかならずしも賛成してはいなかったが。

ルターには、暗殺の危険がつねにつきまとっていた。若いころのローマ旅行を除いて、ルターの行動範囲は、ザクセン選帝侯領周辺にかぎられていた。カトリック側もルターを殉教者にすることを好まなかったのだが。

カトリックが、ルターをアッシジのフランチェスコのように取りこむことは可能だろうか。ルターをどこかの修道院長にして、問題を片づけようという意向もあったようだ。

『新約聖書』のドイツ語訳のほうはどうなったか。

じつはルターは、それ以前に一度ヴィッテンベルクに戻っていた。母親はひげ面の息子

がわからなかった。そこで『新約聖書』の翻訳が、フィリップ・メランヒトンらと計画された。

二度目に帰ったとき、ルターはその翻訳の原稿を携帯し、それはヴィッテンベルクの印刷所に運ばれた。ルター以前にも聖書の俗語訳はあったが、ルターの訳が普及し、それをもとに各国語の聖書が生まれた。

③ ヴィッテンベルクの騒動

ルターの留守中、ヴィッテンベルクでは、騒動が起きていた。カールシュタット博士らが、福音と現実を一致させようという過激な運動を起こしていた。カールシュタットはルターの万人祭司説を字義どおり実行しようとした。カールシュタットは結婚し、聖像破壊運動が1522年2月に起こっていた。

万人祭司説は、ルターの三大文書の一つ、1520年に書かれた『教会のバビロン捕囚』で出された議論といわれるが、一読しても万人祭司説の主張はない。両形色の聖体拝領（パンとワイン）が司祭にと同じく信徒にも与えられるべきことが主張されている。これはフス派が支配していたボヘミアと同じであるから、過激な主張であるが。

では、別の三大文書の一つ、1520年の『キリスト者の自由』には万人祭司説はとられているか？ ここには信仰義認論が説かれている。

もう一つの文書『キリスト教界の改善に関してドイツのキリスト者貴族に宛てて』では、確かに万人祭司説が出てくる。「すべてのキリスト者は真に霊的な階級に属し、ただ職務のため以外には、彼らの間になんらの差別も存在しないからである。」

1522年3月、ヴィッテンベルクに帰ったルターは、保守的になっており、八回の説教で、これら万人祭司説を実行しようとする動向を押さえた。アナーキーな万人祭司説を唱えた二年前からみると、明らかに後退していた。ルターには、カールシュタット博士が百姓風の服装をしたり、下男にファーストネームの「アンドレアス！」と呼ばせたり、結婚したり、農業をしたりすることは、許せなかった。神の国とこの世の国の区別、宗教改革と社会革命の区別をするルターにとって、原始キリスト教への回帰は認められなかった。

しかし、万人祭司説を撤回してしまったのでは、ルターの内部に矛盾が残る。のちの農民戦争における反乱者たちへの態度にしても疑問を残すものとなった。

④ ミュンツァーの経歴

昔、西ドイツに「トーマス・ミュンツァー野戦軍」という過激派がいて、恐れられていた。再洗礼派のミュンスター千年王国と同様、トーマス・ミュンツァーには恐ろしいイメージがつきまとっている。暴力のイメージ、秩序の破壊者、アナーキー。これを吹きは

らうのは難しい。彼は貴族側の捕虜三人を処刑しただけなのだが、支配者側の恐怖がわかるであろう。

彼は秩序の側の暴力によって抹殺されてしまうのだが、彼を革命の英雄に仕立てたのはマルクス主義者であった。そうでない歴史家たちの彼のあつかい方はあいまいだ。賞讃もできないが、否定もできない。ルターやカルヴァンのあつかい方とはちがうのだ。

ミュンツァーは、1489 年ころ、ハルツ地方のシュトルベルクで生まれた。シュトルベルクは初期資本主義的な鉱業における重要な中心地域の一つであった。父はいくらかの財産をもつ樽職人であった。ライプツィヒ大学とフランクフルト・アン・デア・オーダー大学で学び、ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語をマスターした。ヘブライ語の語源学に独自の研究業績をあげ、1513 年、ハレの聖ウルトラウト、および聖マリア聖堂区学校の助教師として職業生活に入った。

1519 年、ルターのグループと接触し、ルターの推薦で、ツヴィカウの説教師となった。ツヴィカウの予言者たちとそこで関係する。1521 年 6 月には、プラハに行き、そこで『プラハ・マニフェスト』を書いている。

ルターとミュンツァーは親しい交友関係にあった。ミュンツァーは後にルターのことを、「ヴィッテンベルクの肉塊め！」とののしっているから、太り始めたルターを見知っていただろう。もしルターがウォルムス帝国議会で皇帝に屈服していたならば、貴族たちに申刺しにされていただろう、と言っている。もっともな議論である。

ミュンツァーは、1522 年の復活祭の後、司祭であったアルシュテットで、オッティリエ・フォン・ゲルゼンと結婚した。オッティリエは、貴族出身。シトー会修道院からの脱走修道女であった。二人は、聖ヴィクトル教会の塔内に居住したと言われている。

1524 年 6 月に、アルシュテットで反乱が起こり、鉱夫たちが司祭ミュンツァーを守るためにかけつけたとき、アルシュテットの女性たちも武装した。彼女たちの先頭には、この年の復活祭に男の子を産んだオッティリエが立っていた。

1525 年、家族とともにミュンツァーはミュールハウゼンに移ったが、すぐに追放された。オッティリエは夫の西南ドイツへの旅の留守中、ミュールハウゼン周辺の村々で、同志たちの夫人に混じって活動していた。

⑤ 千年王国

ミュンツァーは千年王国論者であった。トルコ人による世界征服を終末ととらえていた。実際に、1526 年にモハーチの戦いでハンガリーが敗北し、1529 年にはオスマン帝国がウィーンまで攻めてくる。その前に反キリストを倒して、身を浄めようというのが、ミュンツァーの千年王国論である。ルターは反千年王国論者であるため、千年王国の到来

を遠い未来に置く立場である。

ルターは神秘主義者と呼ばれるが、ミュンツァーは心霊主義者と呼ばれる。ツヴィングリやカルヴァンが、人文主義的であり、合理的なのと比べると、この二人は神秘的傾向が強い。神秘主義とは、神との一体化や神との存在論的合一を重視するものである。心霊主義はそれよりも、聖霊が外的媒介なしに自由に活動することを強調するものである。

第二章 ミュンツァーの怒り

① ドイツ農民戦争の評価

ドイツ農民戦争は、革命なのか、宗教戦争なのか。いずれにせよ、宗教改革がなければ、これほどの大反乱は起きなかったであろう。ドイツ全体で三十万人の農民が蜂起し、十万人が虐殺された。

神聖ローマ帝国内部は、大領邦国家、中領邦国家、と小領邦分立地帯に分けることができる。大領邦・中領邦（ティロル、ザルツブルク、ヴェルテンベルク）の農民戦争では、ラントシャフト（邦民共同体）が組織され、反乱を担った。小領邦分立地帯では、超領邦的運動が起こり、「キリスト教同盟」というスイス型の同盟が結ばれた。ただただアナキーというわけではないのだ。

② 上シュヴァーベン農民戦争

オーストリア大公フェルディナント（カール5世の弟）は、「うすぎたない百姓どもに目にも見せてやれ」と叫んだ。帝国軍ともいうべきシュヴァーベン同盟軍がバイエルンで編成されはじめていた。必要なのは、シュヴァーベン同盟が、反乱を起こした上シュヴァーベン地方の農民との交渉を長引かせることだった。その間にイタリア遠征から帰ってきた、血に飢えた傭兵どもが集められた。

1525年2月、上シュヴァーベン地方では一揆が拡大していた。農民たちは、バルトリンゲン農民団、アルゴイ農民団、湖畔農民団という三つの集団に編成された。カーニヴァルの季節であった。農民たちは、「踊りの相手なら、あそこの尼僧院にいる」とふざけていた。三つの農民団は「キリスト教同盟」というものを作り、ドナウ川沿いのウルム市で、シュヴァーベン同盟と交渉し始めた。彼らは「十二カ条」という綱領をつくり、ルターにも送った。「十二カ条」は、ドイツ農民戦争と全体として呼ばれた反乱の拡大につれてドイツ各地にひろまった。

ウルム市での交渉が破綻し、農民団による城、修道院の破壊・略奪が始まった。一月後、シュヴァーベン同盟軍がやってきた。まず、バルトリンゲン農民団は雲散霧消し、

残っていた農民たちは逃げ出し、ドナウ川の岸辺で虐殺された。アルゴイ農民団も湖畔農民団も応援に来なかった。

次に湖畔農民団が4月、ヴァインガルテンで、シュヴァーベン同盟軍と対峙した。農民側は一万二千人、大砲と四千丁の小銃を持っていた。傭兵経験者も多かった。

騎兵が千五百、歩兵が七千、大砲十八門を備えたシュヴァーベン同盟軍の傭兵部隊が突撃をかけた。湖畔農民団の四千丁の銃が火を吹いた。シュヴァーベン同盟軍の突撃は失敗した。

この戦いで、湖畔農民団が勝つなり、あるいは相討ちとなって、シュヴァーベン同盟軍が大損害を受けるなりすれば、農民戦争全体の勝敗はひっくりかえていたはずだ。エンゲルス以来、言われているところだが、湖畔農民団はシュヴァーベン同盟軍と、ここで協定を結んで、みすみす長蛇を逸してしまった。しかし、湖畔農民団を責めることはできない。彼らも自分たちのために戦っていたにすぎない。

シュヴァーベン同盟軍は、恥をさらすことなく、北のヴェルテンベルク公国に兵を向けた。そこでも、農民戦争がひろがっていた。

③ トーマス・ミュンツァーとテューリンゲン農民戦争

1525年、ミュンツァーは西南ドイツからテューリンゲンへの道をてくてく歩いていた。各地で騒擾が始まっていた。小領邦分立地帯をゆくのが、官憲の目を避けるのには好都合だったろう。フルダ修道院領で逮捕、投獄されたが、ミュンツァーとは露見しなかった。

ミュンツァーは、シュヴァルツヴァルトで、再洗礼派のバルタザール・フープマイヤー博士と出会っている。またシュヴァルツヴァルトで農民に説教した。だからといって、ミュンツァーが農民戦争全体を引き起こしたという説は受け入れられないだろう。

しかし、西南ドイツを旅することで、今まで都市に集中していたミュンツァーの視線は、農村にそそがれ始めた。そうした中で2月下旬、ミュンツァーはミュールハウゼンに帰りついた。

テューリンゲン農民戦争は4月に始まった。八万人もの市民、農民、鉞夫が蜂起した。その頂点にはミュンツァーがいた。反乱者たちは城、修道院を攻撃、略奪した。

反乱は、5月15日のフランケンハウゼンの戦いで、アルベルト系ザクセン公ゲオルク（カトリック）とヘッセン方伯フィリップ（プロテスタント）の連合軍、歩兵四千、騎兵二千三百に、数に勝る市民・農民軍八千（野砲十八門をもつ）が敗れてしまうことで終わった。反乱者たちは、フランケンハウゼン市に逃げ込んだが、そこで五千人が虐殺された。ミュンツァーも捕えられ、仇敵マンスフェルト伯に引き渡された。フランケンハウゼンの戦いののち、テューリンゲン地方の反乱は雲散霧消してしまった。

拷問に耐えられないのは、ミュンツァーばかりではなかろう。ミュンツァーはカトリックに改宗させられ、処刑された。

農民戦争の敗北ののち、ミュールハウゼン市で、ミュンツァー夫人オッティリエは身重であったが、一人の貴族に辱められそうになった。ルターは、それを聞いて激怒し、騎士や貴族にあるまじき行為とし、けだものとののしった。

しかし、オッティリエは、町から町へ放浪せねばならず、歴史から消えていった。町や村は傭兵であふれ、死刑執行人（刑吏）が活躍していた。身重のミュンツァー未亡人の行く末が気にかかる。

④ 「古き法」と「神の法」

上シュヴァーベン農民の「十二カ条」に対し、ルターは第一条から第三条までにしか答えず、あとは法律家にまかせるとした。「古き法」秩序が支配している中、森やアルメンデ（共同地）の条項は、「古き法」に訴えるのが正当だろう。

ただ第三条の農奴制廃止要求をルターはとらえていた。農奴制そのものは、「古き法」にぞくするものだったのだ。農民たちは、それが領主側の「革新」であったなら、「古き法」に訴えることができた。しかし、農奴制そのものを打破するためには、福音という「神の法」に訴えるしかなかった。農民の抗議書には、「我々は神以外の領主（ヘル）をもちたくない」という内容が多かった。

「十二カ条」は、すべての要求を福音によって基礎づける革命的なものだったが、しかし、農民の子孫であり、法律を学んでいたルターには見抜かれてしまった。

ルターは、領主側と農民側の平和的解決を勧告した。

しかし、ルターが「暴徒に対して」でいう、農民たちが、城、修道院を襲った行き過ぎに関していえば、「古き法」に基づき、交渉が決裂したからには、武力に訴えたのである。反乱は急拡大してしまったから、これは大事になってしまったが、ルターの言葉は、農民の武力行使を認めない、領邦君主、領主側の言い分であった。上シュヴァーベン農民は、交渉の期間には、武力行使に至っていない。テューリンゲン地方の農民は、ことの最初から、城、修道院を襲っているから、ルターにはそう見えたのだろう。

農民たちはルターを裏切者と見、カトリックはルターを農民戦争の原因とみなしていた。

(未完)